

王子さまの^{まも}守^{びと}り人

目次

王子さまの守り人^{まも}_{びと}

序章	目覚める前に	7
第一章	ツリーハウスの王子さま	10
第二章	名前のない異邦人 ^{いほうじん}	39
第三章	王子を護る仲間たち ^{まも}	123
第四章	“星 ^シ 心 ^ニ 殿 ^{ツム} ”	154
第五章	私の居る日常	219
終章	王子さまの守り人 ^{まも} _{びと}	274
おまけ	小梅のお弁当	286

登場人物 紹介

ファシード
の部下
▶
『外道』
▼『偏愛』

▲レモニーナ

ラストの師匠で、“星心印”
研究の第一人者。

▲ファシード

国王の第二夫人の弟
で、貿易会社社長。
豪快な性格のプレイ
ボーイ。

ひのこうめ 日野小梅▶

三人姉妹の長女で、
年の離れた末妹を育
てた経験あり。異世界
トリップして“王子”の
お世話をすることに。

▲カザム

国王の第二夫人付き
の護衛士。穏やかで
少し天然の気あり。

▲ラスト

国王の第二夫人付の医師
で、“星心術士”。
頭は切れるがやや皮肉屋。

▲王子

小梅が異世界で出会っ
た赤ちゃん。
“王子”は小梅がつけた
仮の名前。色々事情
がありそうだが……

もりお ▲森男

小梅に食料を運んで
くれる、パンダに似た
謎の大型動物。

王子さまの守り人^{まも びと}

序章 目覚める前に

昼間からカーテンを閉め切った、薄暗い部屋。

「なるべく、物音をお立てになりませんよう……」

かすかな声が出て、扉が音もなく開かれる。扉の外にも幕が引いてあるのか、そこから光が射し込むことはなく、二つの人影だけがするりと部屋にすべり込んだ。

「……」

片方の人影が、目の前の光景に一瞬息をのむ。

部屋の中央には、透き通った巨大な球体が浮かんでいた。その表面にはさざなみが走ったり渦^{うず}が起こったりしている。かすかに発光する水が、球状になって浮かんでいるのだ。

そして、その球体の中心に、一人の小柄な若い女の身体が浮いていた。

着ているワンピースの裾が水の流れに合わせ、膝のあたりでふわりと広がったり、身体の線にそって緩やかに巻きついたりを繰り返す。

ノースリーブの袖からは、ほっそりとした腕が、まるで何かを受けとめようとしているかのよう
に広げられている。顎下ほど長さの黒髪がゆらゆらと揺れ、時おり頬にかかるものの、その瞳は閉
じられたまま。

人影は、そつと自分のローブのフードを脱いで背中に落とした。

結び上げられた栗色の髪、青い瞳——大人しやかな美しい女性だが、表情にはほのかに憔悴の色
が浮かんでいる。その唇から、ささやき声が漏れた。

「……死んではいないのよね……？ 大丈夫なの？」

「はい」

もうひとつの背の高い人影は、ローブのフードを取らないまま、軽く頭を下げて低い声で答える。
「空間を渡ってきた当初は、環境の激変から衰弱しておりましたが、今は回復しております。この
水を通して環境に適応させ、栄養を取りこんでおりますので……」

「そう……まるで、母親の胎内に浮かんでいるようね……この子のように」

青い瞳を伏せ、女性はその手でそつと自らの腹部に触れた。そこにはそれとわかるほどに、はっ
きりとした膨らみがあり、命を宿していることが一目で知れる。

背の高い人影が、静かに話しかける。

「この者なら、と。……いかがでしょうか」

青い瞳が揺れる。彼女はもう一度視線を上げ、そしてはっと息を呑んだ。

水の中の女が、うつすらと眼を開いていた。黒い瞳は、夢見るようにゆるゆるとめぐらされ、青

い瞳とほんの一時視線を絡ませ……再び閉じられる。

「……………」

そのままもう眼を開かない女をしばらく見つめた青い瞳は、やがて決意の色を浮かべる。

「この方に託します」

背の高い人影が、深々と頭を下げた。

「仰せのままに」

初夏の陽射しも夕方になるといくぶん弱まって、涼しい風が吹き始めていた。

ホテルの中庭は森の中をイメージした庭園になっていて、木陰の細長いテーブルには軽食と飲み物が用意されている。招待客たちは思い思いに散らばり、飲み物を片手に新郎新婦が出てくるのを待っていた。

新婦側である日野家の親族が賑やかに談笑する中、私も伯母と一緒に白樺の木の下に立って、話をしながら二人を待っていた。

「いいお式だったわね。小彩ちゃんが無事に結婚して、おばさんも何だかホッとしたわ」

色留袖姿でフルトグラスを傾けた伯母は、私を見て意味ありげな笑みを浮かべる。

「母親代わりだった小梅ちゃんも、少し肩の荷が下りたんじゃない？ 今度は小梅ちゃんが幸せになる番ね。いい人いないの？」

「そうですね。まあ、まだ手のかかる下の妹がいますから」

私はぼかしながら答えた。実際、私たち姉妹は母を早くに亡くしているので、まだまだ私が下の妹の面倒を見たいと思っているのは本当だ。まあ、他にも理由はあるんだけど……

そんな私の言葉に伯母は軽く目を見張った。

「まさか、七緒ちゃんが大きくなるまで結婚しない気？ だって七緒ちゃんはまだ……」

「お姉ちゃん」

呼ばれて振り向くと、下の妹の七緒がホテルの外廊下を走ってくる場所だった。庭園との間の段差を飛び下りると、夏らしいドット柄のワンピースの裾がひるがえる。

私は伯母に断ってその場を離れ、七緒の方へ駆け寄った。

「こら、走らないの！ まだ治ってないんでしょ」

「平気平気！ もう全然痛くないよ」

七緒は軽く飛び跳ねて見せた。小学校三年生の七緒は、先日の学校の体育の時間に足首をねんざしていたのだ。

「……なら、いいけど……。遅かったね、トイレ混んでた？」

尋ねると、七緒は一息ついて、

「うん。あー良かった、彩姉がブーケ投げるのに間に合ってた」

とにっこり。笑うと、亡くなった母にそっくりだ。

七緒は、長女の私のことを「お姉ちゃん」、次女の小彩——今日の花嫁——のことを「彩姉」と呼ぶ。昔はもつと甘えた呼び方をしていたのに、最近急にすっかりしてきた。

ううん、すっかりしたんじゃない……ねんざした時も、私の手を煩わせないようにとしばらく内緒にしていた七緒。まだ甘えたい年頃なのに、あることをきっかけに急に大人になろうと無理を始めたのだ。

「ブーケ欲しいの？ 小学生のくせに、なつまいき」

私がわざと明るい声でからかうと、七緒は首を振った。

「違うよ、お姉ちゃんがブーケ取るところを見たいの」

「私？」

「うん。だって彩姉、お姉ちゃんに向かって投げると言ってたよ」

小彩は私の二歳年下で、二十三歳。うわぁ、姉が妹にブーケもらうって、何だか微妙？

「絶対取ってね、お姉ちゃん」

こぶしを握る七緒に、私はつい苦笑いしてしまった。

ほんの数ヶ月前、かなり手痛い恋の終焉を迎えた私。小彩も七緒も、そんな私を元気づけようとしてくれているんだろう。受け取ると幸せな結婚ができるという、花嫁のブーケで。

小彩の結婚はもちろん嬉しい。ついさっき、教会に響くオルガンの音の中で愛する人と将来を誓った小彩は、見とれるくらい綺麗だった。

でも、そんな幸せそうな妹を見ると、どうしても自分の辛い記憶がよみがえる。妹の幸せが、自分の不幸せでくすんでしまうような気がして切なかった。本当なら、今日の青空みたいな曇り一つない気持ちで祝福したかったのに。

わあっと歓声が上がって、我に返る。見上げるとうわさの新郎新婦がお色直しを終えて、ホテルの二階のバルコニーに登場したところだった。

新婦の小彩は、白地に黒のレースを重ねた上品なカクテルドレス姿。小彩がドレスを選ぶ時に私も一緒に行ったんだけど、二人して「これだ！」って言ってすぐに決めたんだ。それくらい、小彩のイメージにぴったりだった。

姉の欲目かもしれないけど、父親似の小彩はきりつとした美人で、シツクな色合いがよく似合う。

小彩と目が合うと、彼女はにっこりと微笑んで小首を傾げた……ように他の人には見えただろうけど、実は私に向かって、「前に出てこい」とばかりに軽く顎をしゃくつたのである。め、メヂカラもすごいです。

「ほら前に出て！ ブーケ取って、早く新しい彼氏見つけてよ。出来ちゃった婚してもいいよ？」

七緒がませたことを言いながら背中を押してきて、私は花嫁の同僚や友人たちのすぐ後ろに立たされた。

花嫁が後ろ向きになって、予備動作に入った。ちらりと振り向いて、こちらを確認しているのがわかる。

「わかった、わかったよ。ブーケもらって私も幸せにならないとね」

苦笑しながら言うと、七緒はまだどこか心配そうに、それでも一生懸命に笑顔を作ってた。

「そうだよ。そしたら次は、お姉ちゃんのブーケ絶対、私にちょうだいね！」

私も笑顔で七緒にうなずくと、バルコニーを見上げた。

お互いに、空元気……早くここから脱却しなくちゃ。そう、もし受け取れたら、今のこの重苦しい気持ちを断ち切って新しい恋をしようって気持ちになれるかもしれない。そうしたら、七緒だって。

白いバラのブーケが、宙に舞った。レースのリボンがひるがえる。私が両手を伸ばしたその時。

急に、周りから音が消えた。

——あれっ？ 水の中？

プールに潜って水面を見上げた時のような、透き通った波紋が幾重にも視界に広がった。

その中を落ちてきたブーケに手が触れた、と思った瞬間、いきなり左の手首に何か細くて熱いものがシュルツと巻きついた。

その直後、音が戻ってきた。

ゴウツと風が——違う、光る水のようなものが渦を巻く。招待客の誰かの悲鳴が、ときれときれに聞こえた。

左腕がぐつと引つ張られる感覚。反射的にブーケを強く握りしめた時、足が浮いた。

身体が渦の中に巻き込まれ、すぐに何もわからなくなった。

——ずいぶん長いこと、不思議な夢を見ていた気がする。水の中をたゆたうような浮遊感があった、遠くから誰かの声が、高く、低く聞こえていた。

そして。

「うわっ！」

どん、と背中に衝撃が走って目が覚めた。

身体に薄手の毛布が巻きついていて、身動きが取れない。軽く右側に転がると、木製のベッドにぶつかった。どうやら寝相が悪くて、ベッドから転がり落ちたみたい。

「……え……ここどこ」

どうにか毛布から両腕を引き抜き、上半身を起こす。なぜか頭がすごく重くて、ゆっくりとした動きになった。

見回してみるとそこは、天井にも壁にも床にも明るい色合いの木材が張られた、六畳くらいの部屋だった。

窓からはカーテンを透かして光が射し込み、部屋と同じ木材でできたチェストを照らしている。

柔らかなその光が妙に眩しくて、私は目を細めた。

……私の部屋じゃない。

私、妹の結婚式に出席するっていうんでホテルにいたはずだよね。ここ、ホテルの部屋？ 倒れたか何かして運ばれたのかな。でもホテルの部屋にしちゃあ粗末というか……あ、別館のコテージ？

混乱して、色々な考えが次々と頭に浮かんで消える。床に座り込んだまま、私は一度目をつぶった。

落ち着いて、落ち着いて。そう、確かにホテルには行つた。敷地内の教会での式にも出席した。それから……そう、披露宴の前に中庭で小彩がブーケトスをやったんだ。

でも、ブーケをキャッチしたとたんに、カツオの一本釣りみたいに何かに引っ張られて……

……思い出したところで何の参考にもならない。結局何なのよ、あれは。

がつくりと下を向くと、自分の両手が目に入った。すると、あの時何かが巻きついたと思つた左手首に、薄い緑の帯のような模様が三重ほど入っているのが見えた。

手をかざし、角度を変える。光に当たってキラキラと煌めくそれは、薄くてよくわからないけど、細かい奇妙な文字がびつしりと連なつたもののように、こすつても取れない。

「……何が何だかサツパリだけど、とりあえず披露宴のごちそうを食いつぶれたことだけは確かみたいね」

披露宴は夕方からスタート予定だったが、窓から入る光の具合からして、どうやら今は朝みただし。

お腹がぐうつと鳴つた。何か食べられる所へ行こう、とベッドに手をかけて立ち上がったとたん、今度はとんでもないものが目に入った。

ベッドの上ですやすやと眠る……裸の赤ちゃん。

あ、ついでに、男の子だ……じゃなくて!!

今度こそ私はパニックに陥つた。

何で、私が、赤ちゃんと一緒に寝てるの!?

「お、おとおおお母さん、この子のお母さんはどこー!？」

慌てて立ち上がった床の毛布に足をとられ、転びそうになるのを手をついて堪えてまた起き上がり、とバタバタしながら、私は部屋のドアを開けて飛び出した。

出た所は小さなダイニングキッチンで、やはり床も壁も低い天井も板張り。同じ素材のテーブルにはベンチが二つ。壁際には黒い……薪ストーブ!? そして小さな調理台兼棚と陶器の流し台、壁には作りつけのカップボード。

一目で誰もいないことはわかったので、そのままもう一つのドアに突進して開け放つ。

ふわっ……

優しい陽射しと、緑の香りのする微風に包まれた。

広い窪地。綺麗にボウル型をしたそこは一面の草地で、ところどころにある背の低い藪にはちらほらと花が咲いている。浅めのボウルの広さは半径二十メートルといったところ。周りは三六〇度森になっていて、奥は薄暗く透かし見ることはできない。

ボウル一番底には、一本の巨木が天を突くように伸びている。白樺のような白い幹は、角度に

よつては向こう側がぼんやり透けて見えるという、不思議な樹だった。

根元には小さな泉が湧き、木の根の一部が透き通った水の中に没しているのが見える。その泉の脇から階段が始まり、幹に沿って二度ほど折れ曲がって、太い枝まで登れるようになっていて。

その枝の上、泉の上に張り出すように作られたツリーハウスのバルコニーに、私は立っているのだった。

どのくらい呆然としていたのか。

「ふ、ふえ、ほええええええ」

それが赤ちゃんの泣き声だと気づいて、私は飛び上がった。

寝室に駆け戻ると、やはりベッドで赤ちゃんが顔をくしゃくしゃにして泣いている。おっかなびっくり抱き上げたら一度は泣きやんだものの、これから色々と生理現象が起きればまた訴えを起すに決まってる。

そう……七緒が生まれた時から世話をしてきた私は知っている。赤ちゃんのお世話は、待ったナシだということを！ 親捜しはひとまず棚上げだ！

「泣かないでね、泣かないですよ」

無茶な要求をつぶやきながら、部屋中の戸棚という戸棚、箱という箱をあさる。布おむつらしきものと肌着を発見して着せると、赤ちゃんは落ち着いたのかまたベッドですやすやと寝息を立て始めた。

よ、良かった……このスキに、色々対策を練らないと。

キッチン調理台の上に、哺乳瓶ほにゅうびんと並んで陶器の壺つぼが置いてあった。開けてみると白い粉末が入っていたので、ええいとばかりに味見をしたら、これが粉ミルクらしかった。

キッチンの隅の天井には滑車を取りつけられていて、ロープと木桶がかけられ、その下の床には上げ蓋がある。開いて覗いてみると、ちょうど真下が泉だった。ここから水を汲み上げる仕組みなら、たぶん飲み水としてイけるんだろう。他に水道の蛇口みたいなものはないしね。

誰がこのツリーハウスの持ち主なのかは知らないけど、色々と必要なものが準備されているところからして私や赤ちゃんに害はないと見て、そこにある全てを信用することにした。

「つていうか、それ以外にどうしろつていうんだこのやろー！」

破れかぶれになりながら、煙突のついた薪ストーブの前に屈かかみこむ。

これどうやって使うんだろ。ほらアニメ映画であったじゃない、頭におっきなりボンつけた魔女の女の子が、壊れたオーブンレンジの代わりに薪オーブンか何かを使う場面が。ああやればいいのよ。薪とマッチ、それに焚たきつけ用の小枝はストーブの脇に置いてあったので、着火に取りかかる。

え、何で薪を入れる扉以外にも扉があるの？ アニメと違ううー！

後で色々試して、空気の取り入れ口やら灰をかき出す扉やらがあるということを理解したんだけど、この時は適当に扉を開け放して焚き火感覚で火をつけた。換気だけはちゃんとして、重い鉄鍋に水を汲んでストーブの上に置いて湯を沸かす。

カップボードから勝手に陶器のマグカップを出し、さっきの粉ミルクを入れてお湯を注ぐ。まず



自分で毒見……うえつ甘つ。でも粉ミルクってこんな感じの味よね、濃さは適当だけど。

しばらく自分のお腹の具合を見て、大丈夫そうなら赤ちゃんに……と思ったところで、とうとう赤ちゃんが再び火のついたように泣き出した！

「わあああわかつたわよあげるって！」

哺乳瓶ほ乳びんはごく普通のガラス製だった。ベンチに腰かけ、ぎこちなくもどうか赤ちゃんに飲ませ始めたところで、やっと私は赤ちゃんをゆっくり観察することができた。

髪はまだあまり生えていないけど、キラキラ光って、金髪か明るい茶色みたい。まだ目を開けたところを見てなかったの、はいごめんよーとまた瞼をぐにと引つ張ってみると、瞳は綺麗な……紺色ロイヤルブルー。ガイジンの赤ちゃんだったのか。整った顔立ちで、赤ちゃんモデルとかやれそうだ。

しかし小さい……手足も細いし首もグラグラしてる。まだ赤ちゃんも赤ちゃん、生まれて間もない新生児じゃないの？

「あなたのお母さんはどうしたんだろうね、『王子』さま？」

私の女友達が、自分の息子のことを「うちの王子がさー」と呼んでいたのを思い出し、私は一心にミルクを飲むこの赤ちゃんを、仮に『王子』と呼ぶことに勝手に決めた。

一息ついて、あたりを見回した。

キッチン窓の上に、ドライフラワーが下げられている。この部屋で初めて装飾らしいものを見たな、とまじまじ見て……それが、バラの花であることに気づいた。

レースのリボンに、見覚えがある。
妹の小彩が投げた、あのブーケだった。
いったい、妹の結婚式からどれだけ時間が経ってるんだろう？ ブーケがドライフラワーになるほど？

見れば、自分の髪も記憶より伸びていて肩にかかっている。あの日はラベンダー色のパーティードレスを着ていたはずなのに、今は木綿もめんの白い七分袖シャツにカーキ色の木綿のエプロンドレス。もうちょっと装飾が多かったら『森ガール』って感じ。下着も木綿で、えらく素朴な形のものを着けてるらしい。

自分で着替えた？ 覚えていない。じゃあ、誰かが着替えさせたの？ それもわからない。
私、記憶喪失になってるんだらうか。

そこでさらに、突拍子もない考えが浮かんだ。

まさか、この赤ちゃん。

「私が産んだんじゃないでしょうね!？」

ないないないない！ と言いたいところだけど、あり得ない話でもないじゃないの！ 時間が経っているなら。

花嫁のブーケを受け取ったら、御利益あらたかとはかりに即座にステキな男性が現れて、それがガイジンで、あつという間に結ばれて妊娠して産んじやって、その後で記憶喪失になったとしたら、そしたら約十ヶ月は経っていることになる。

そんなことを考えているうちに、王子はミルクを飲みながら眠ってしまった。そーっと哺乳瓶びんを口から離すと、王子は一瞬だけ乳首を探すようにちっちゃな口元をあむあむさせたけれど、そのままふにやつと力を抜いて静かに寝息を立て始める。

あ、げっふしないで寝ちゃったな。無理にさせなくてもいいんだっけ？ わ、忘れたよ、七緒の世話をしたのはもう九年前のことだし。

ちよつと心配だったので、ミルクを吐いた時に喉のどに詰まったりしないよう、とりあえず王子の顔をそーつと横向きにしてベッドに寝かしつける。……よし。

落ち着いたところで私はエプロンドレスごとガバツとシャツをまくり上げ、誰もいないのをいいことに自分のお腹をじっくり観察した。

そして、ほつとした。王子はどう見ても新生児だし、私が産んで間もない母親だとしたら、こんなにすぐにお腹がべつたんこに戻るわけがない。友達が、産後ダイエツトがどうか言ってたもの。それじゃあ一体、この子はどこの子なんだろう……

考えていても仕方がない。私は再び、ツリーハウス探検を開始した。

寝室のチェストには、私のためのものらしい着替えやタオルが一通り揃っている。キッチンも改めて調べてみると、たらいや洗濯板などのレトロな家事道具、裁縫セットなんかが見つかった。

戸棚には日持ちしそうな黒っぽいパンのかたまりと、塩や何だかわからない香辛料がいくつつか、乾燥した香草らしきもの、それにカゴに入った根菜類があった。

今になってようやく自分が空腹だったことを思い出し、遠慮なくパンを分厚く切って薪ストーブのフライパンで温めて食べたけど、これどう見積もっても三日で食べつくしちゃう量だよなーなどと、王子の残したミルクをぐびぐび飲みながら考える。

ミルク作りすぎちゃったよ……王子はまだちょっとしか飲めないのね。
目覚めた時私は裸足だったんだけど、ベッドの脇に丈夫そうなスリッポンが一足置いてあったので、それを履いてもう一度バルコニーに出てみた。王子が起きて泣いたらすぐわかるようにドアは開け放しておいて、階段を下りてみることにする。

木の幹に手を滑らせながら、ゆっくり下りる。手に触れる幹はほのかに温かい。
本当に不思議な樹……ほんやり透けてるなんて。

幹に触れた手に、ぽつんとしずくが落ちた。雨かと思回すと、草地の方は濡れていないのに、泉の表面に、ぽつん……ぽつん……と波紋が広がっている。梢からこぼれたしずくが、泉に落ちていくのだった。

この泉、川から水が流れ込んだりしてないのに、水がすごく綺麗よね。やっぱり湧き水なのか、それともこの樹からこぼれたしずくがたまって泉になって、少しずつ地中にしみ込んでいつてるのかな？

地面に下り立ってふと横を見ると、木の幹に隠れるようにして細長い物置のような建物があった。なぜか土台部分が高く作られていて、数段の階段を上るとドアに手が届く。

サイズといい作りといいアレだろう、と開けてみると、見慣れた洋式便座。ポットンでした。ツ

リーハウスから樋のようなものがここまで延びているということは、キッチンの流し台からの排水もここに流れるようになってるのね。

ずっと深いところでかすかにゴーツという音が聞こえるんだけど、水音なのかな……うーん、もういいや、深きは考えまい。誰か人に会えたら聞けばいいんだから。

ぐるりとあたりを見回すと、森のあちらこちらから小動物が覗いていた。リスやネズミに似ているけれど、遠目に見ても耳やしっぽの形や毛の色が、私知っているものとは微妙に違う感じがする。空を見上げると、見たこともないカラフルな鳥が群れをつくり、森によって丸くくり抜かれた青空を横切っていた。

意外にも冷静に、私は事実を受け入れていた。

ここは、私のよく知っている世界ではない。どこか異なる世界に、私は来ている。

その日に見て回れたのは、これではほぼ全部。

王子はしょっちゅう目を覚ましては、ミルクくれーおむつ替えるーと泣くし、布おむつは洗わなくてはいらない。洗ってバルコニーの手すりに干して……なんてやっつてるうちにどつと疲れが襲いかかってきたので、王子が寝ている時は私も寝て休むことにした。

ふと目を覚ましたら、あたりは薄暗くなっていた。またもや慌てふためいて、テーブルの上に置

いてあったランタンと格闘して火をつける。あつぶな、真っ暗になったら物の配置がわからなくなるところだったよ。

お湯を沸かしていると、ちょうど王子が目を覚ましてふびや、ふびやと泣き出した。私は玄関ドアを開けてすぐの所にランタンを置くと、王子を抱っこし哺乳瓶ほにゅうびんを持ってバルコニーに出た。

とっぷりと暮れた窪地には、相変わらず人間が訪れる気配はない。それを確認してから、私は階段の下り口に腰かけた。

「結局、王子のお母さんも誰も来なかったね……」

王子にミルクを飲ませながら話しかける。王子は目を閉じたまま、んく、んく、と喉のどを鳴らしている。夜でもかなり暖かく、森の闇は深く静かだった。泉の上を、蛍のような光がふわふわと舞っている。見上げれば、空には満天の星。こんな風に座っていると、夏の夜に田舎の家の縁側で涼んでるみたい。

……何もかもわからないんだから、もっと不安になってもいいような気がするんだけど、私、何でこんなに落ち着いてるんだろう。

まあ、あえて言うなら、ドライフラワーのブーケを見て時間がずいぶん経っていると知ったからかな。ここに来てすぐならともかく、もうずいぶん経ったなら今さら騒いでもしょうがないでしょ、みたいな。

小彩や七緒は心配しているだろうか。それとも記憶がない間の私は、その辺のこともクリアした上でここに居るんだろうか。

ふと湧き上がった、胸の奥がじわじわと締めつけられるような不安も、この不思議な場所にゆっくりと溶け出して薄められていくような気がしたけれど、私は一度強く瞳を閉じてそれを遮断した。妹たちの記憶を逃さないように。

翌朝。

小鳥の歌が聞こえた気がして、ゆっくりと目を開いた。朝の光が室内を明るく照らしている……やっぱ昨日と同じ、あのツリーハウスの部屋だ。

顔を傾けると、私のすぐ横で王子がぼちちりと目を開けて手足をもぞもぞさせていた。

「おはよう」

声をかけながら手に触れると、王子は私の指をきゅつと握り返してニコツとした。

……可愛い。きゅん。

「お世話は大変だけど、王子がいて良かったかも」

そう話しかけてみる。私一人だったら、きっとパニックになっていた。いや、いきなり育児つのも十分パニックになりましたけどね。

他のシチュエーションでもパニックになってたかもしれないな……例えばベッドに居たのが王子じゃなくて、大人の男性だったりしたらね。いやあ、若すぎるほど若い男で良かったよホント。

「さあ家事家事！」

私は勢いをつけて起き上がった。何だかわけのわからない状況でも、衣食住は大事ですからね、

人として！

キッチンでお湯を沸かしながら、野菜の皮を剥く。野菜は見たことのないものばかりだったけど、端っこをかじってみれば芋系とか瓜系とかがわかったから、どうにか調理のしようはあった。お湯の一部をミルク用にし、残りのお湯は野菜の塩茹でに使う。

王子にミルクを飲ませてげっふさせ、抱っこしたままパンと茹で野菜の朝食を食べていると、王子はまた眠ってしまった。飲んじゃ寝、飲んじゃ寝しているその様子からも、まだ生まれて間もないことがわかる。この子を産んだお母さんは、今頃どうしているんだろう。

王子をベッドに寝かせ、私は今のうちに洗濯を済ませてしまおうと、たらいやら洗濯板やらを持って外に出た。

バルコニーの手すりにはオレンジ色の小鳥がとまっていて、チュイ、と短くあいさつしてくれる。思わず笑顔になって、「おはよう」と返事をした。

それが目に入ったのは、階段を下り切って顔を上げた時だった。

「……パンダ？」

姿かたちと言いだきさと言いだ、パンダにそっくりな動物が立っていたのだ。ただし、お馴染みの白黒ツートンカラーではなくて、茶色と黒と白のレッサーパンダに近い配色。

そのパンダもどきは、私からそこそこの距離を保ったところで座っている。

私が固まっていると、彼（彼女？）は首のあたりをひつかくような動作をした。すると、どうや

ら首に紐で結びつけられていたらしい大きな袋が、どさりと地面に落ちる。

パンダもどきは、これでやることは終わったとばかりに意外な身軽さで窪地の斜面を登り、森の中へと消えていった。

私は終始、固まったままだった。

ベッドに腰かけ、私は考え込んでいた。

パンダもどきが持ってきた袋の中身は、新鮮な野菜が何種類かと、新しいパンだった。これでもた数日は、食べ物に困らないわけね。

しかしまさか、人間以外のものに食べ物をもらうとは……お代はいいでしょようか。

あの後、我に返ってパンダもどきの後を追ってみようかと思っただけど、それは叶わなかった。だって、王子がいる。こんなに小さな赤ちゃんを連れて、うっそうとした森の中に入るわけにはいかないし、ツリーハウスに一人ぼっちで置いていくなんて論外だし。

そう、私は王子と二人きりである限り、とにかくしばらくの間は、この窪地を出ていくことができないのだ。

……誰かが、狙ってこの状況を作ってるってことはないよね？ 王子を利用して……ううん、まさかこんな生まれたての赤ちゃんをそんな風に使うなんて、あり得ない。

私は頭を振ってその考えを追いやった。

気がつくのと、いつの間にか目を覚ました王子がこちらをじっと見ている。潤んだ大きな紺色の瞳

は、汚れを知らない澄んだ輝きで私を癒した。

「暗い顔してごめんね！」

私は王子を抱っこして立ち上がり、くるりと一回転した。

「本当のママじゃないけど、お世話がなほるから、よろしくね。っていうか、もう一つ屋根の下で夜を過ごしちゃった、ただならぬ仲だもんね！」

私のハイテンションにもかまわず、王子はひとつあくびをした。

それから三日ほど経って、またあのパンダもどきが現れた。今度は食料と、追加の薪^{まき}まで持ってきてくれた。

荷物を下ろして再び去ろうとするパンダもどきに、声をかけてみる。

「あの、ありがとう。どうして色々持ってきてくれるの？ 誰かに飼われてるの？」

パンダもどきは、振り返りはしたけれど、その不思議な色の瞳——ダークグリーンの瞳でこちらをちよつと見つめただけ。またすぐに去っていった。

こうして、パンダもどきは何日かおきはこの窪地にやってくるようになった。呼び名がないと不便なので、こちらも勝手に「森男^{もりお}」——どうやら男の子みたいだし、いつも森からやってくるし、瞳がグリーン系だから——と呼ぶことにした。

「森男」が持ってくる物は、少しずつバリエーション豊かになっていった。お茶の葉に焼き菓子な

どの嗜好品^{しょうひん}、ランタン用のオイルに自然素材の石けんなどなど。

ある日など、森男が袋を下ろした後、鼻づらでそれをこちらに押しやって、早く開けろというようにそこを動かなかったことがあった。そのキャンバス地っぽい丈夫な袋を開いてみると、なんと大きな葉に包まれた鳥の肉が入っていた。

一目で鳥だとわかったのは、小ぶりとはいえ丸ごとだったから。羽はむしってあったけど、こんな状態の肉を触るのは初めて……でも正直、久しぶりの肉はうれしい。

「うわぁ肉だすごいっ、ありがとう森男！」

私は嬉しさのあまり、くるくるくると三^{トリ}回^ル転^{アケ}半^セ。

はつと気づくと、森男がジーツとこちらを見ていた。……呆^{だま}れられてる？

「えっと、さっそくお昼ご飯に食べようかな。森男も食べてく？ あっ、もしかして草食？ 私、

割と肉食系なんだよね」

照れ隠しに立って続けに話しかけると、森男は完全スルーで立ち上がり、いつものように窪地の斜面を登って森の中へと去っていった。つれないなあ。

「もしかして、冷蔵庫ないから早く調理しろって意味で、袋を開けさせようとしたのかな？ だとしたら賢すぎるな森男……」

さっそく調理しながらつぶやく。まあいいや、ローストチキンいただきまーす！

味付けはキッチンにあった調味料で適当にやったけど、呆^{だま}けてしまうくらい美味しかった。残りの肉もポトフっぽくして、骨からダシも取って、翌日翌々日も楽しんだ。

運動しないと太っちゃうな、こりゃ。

私は毎日、王子と一緒に花や鳥を眺めながら、窪地の中を散歩するようになった。どうせ誰もいないので、散歩以外にもラジオ体操したり、テレビゲームで覚えたヨガをやってみたり。

その横で、地面にタオルを敷いて寝かせた王子は、自分の握りこぶしを見つめて遊んで(?)いる。そうそう、赤ちゃんって、自分の手の存在に気づく時期っていうのがあるんだっけ。興味深げなその仕草がなんとも可愛らしいです。

薪を一本シャベル代わりに使って斜面に足がかりを掘り、ちよつとだけ森の中を覗きに行ったりもした。ツリーハウスにあった裁縫セットから糸を持ち出して、木に結んでおいて少しずつほじきながら、あたりを探検するのだ。

でも、もし途中で糸が切れて道に迷ったら……とか考えると怖かったし、糸が茂みに絡まって使えない物にならなくなりそうだったので、いつしかやめてしまった。

王子が眠っている時などに、ぼつかりとやるのがなくなつて寂しくなった時もあった。そんな時、一人で泉の縁に腰かけ、足を水に浸してぼーっとしてしていると、いつの間にか森男がそばでうずくまっていた。

そう、森男と一緒に暮らしてくれたらもつと楽しいのに……と思つて、毛皮を撫でたり、食べ物をお勧めたりと誘惑してみたんだけど、彼はいつも短い滞在で窪地を去ってしまうのだった。やっぱりつれないヤツ。

そんな風に、私と王子はひたすら、ツリーハウスとその周辺で日々を送つた。

ここで目覚めて、二週間が経つたある日。

私は王子をお風呂に入れていた。赤ちゃんは新陳代謝しんちんたいしやが激しいから、毎日洗つてあげないとね。たらいにお湯を張つて王子を入れ、片手で支えながら洗うんだけど、王子はお風呂が大好きなよううでウツトリと目を閉じて脱力している。うふふ、可愛いなあ。

そこでふと、私は気づいた。何だか、あの新生児の頼りない感じがなくなつているような……。あ、首が据わすつてる？ 早くない？ こんなもん？

そしておよそ三週間目。あやすと王子が声を上げて笑うようになった頃。

寝ようと思つてベッドに行くと、先にベッドに寝かせてあつた王子がうつぶせになつていた。寝返りをしたのだ。

「すごいすごいー」

私は拍手して、王子を仰向けあおむに戻した。王子はまた、寝返りをしようとして身体をよじる。つて。待つてよ。寝返りつてこんなに早い？ 私の知つてる成長のスピードと、全然違う。

「ねえ……王子、これでいいのかな？」

抱っこして瞳を覗き込んでみたものの、王子は黙つて(?)よだれかけをしゃぶつてベトベトにしているだけだった。

その後も、王子の成長は早かった。

二ヶ月も経つと、ハイハイを始めた。家の中ではストープに触りそうだし、窪地に連れ出せば泉に近づこうとするので気が抜けないけれど、呼ぶと振り向くなどの反応があるので、生活がとても楽しくなってきた。

三ヶ月目には、つかまり立ち。立つてから手を離し、得意気にこちらを見てニカーツと笑うのが可愛らしい。高いところのものを取ろうとしたりするのでやっぱりドキドキだけど。

四ヶ月目の半ば過ぎにはとうとう歩き出し、窪地をよちよち散歩したり近寄ってきた動物に触ったりし始めた。まだ斜面を登るまでには至らないけど、そろそろ迷子に気をつけなにと。

その頃には、王子は一歳児くらいの大きさになっていた。伸びた髪は綺麗な金髪。食事も私とはほとんど同じもので大丈夫になり、モリモリ食べている。

最初に着ていた服は、すぐに小さくなって着られなくなった。ヒマなので、使わないタオルや私の服を使って、王子の新しい服を縫った。

裁縫は下手なので出来上がりはアレだけど、誰も文句を言う人はいないのでヨシとしよう。良かったよ、敵いお姑さんみたいなのがここにいないくて。

何でこんなに成長が早いのか、もちろん不思議に思っていた。でも、この場所が普通じゃないことは最初からわかっていたので、私はそのまま受け入れることにしていた。

もともと環境に馴染むのは早い私。転勤族の家庭で育ったのも一因かしら。

それに王子は、よく食べよく笑いよく眠る、出来すぎなくらい本当によく出来た赤ちゃんだった。顔立ちはますますはつきりしてきて、こりゃあイケメンになるだろうなーと親バカ、いや保護者バ

カ丸出しになってしまう。

私が普通に結婚して子どもを産んだなら期待できるはずの、夫や実家やママ友の助けは、ここではもちろんない。そんな『密室の育児』なのに、私はこの不思議な場所でごく穏やかに、育児ノイローゼになることもなく日々を過ごした。

もし今になって本当の親が現れて、王子を返さなくちゃならなくなったら……それともその前に、王子がもう少し大きくなった時点でこちらから探しに行く？

その時のことを考えるとぼうっとしてしまい、時々料理を焦がすこともあった。

ある日、私は窪地で王子と一緒に、手作りの布製ボールで遊んでいた。私がボールを投げると、リスっぽい小動物と王子が競って追いかけていく。ついこの間歩き始めたと思ったのに……まさかもう一歳半とかそれくらいまで成長しちゃったのかしら？

ちなみに動物たちは、私のことは少し警戒しているらしくて多少距離を置いているんだけど、王子には全く遠慮なしに近寄るし、肩に上ったりもするんだ。

その時、木々の間から森男が現れた。斜面を下りてとつすとつすと歩いてくる森男を指さし、王子が私に、

「もーお！ もーお！」
と教える。

「おつ、王子、森男の名前が言えるようになったの？ すごいねー」

私は喜んで拍手した。私の名前よりも先に覚えたか……まあ、私が「森男」「森男」ってよく言うからね。逆に私のことを呼ぶ人はいないわけだし。

「それじゃあ次は、私の名前も覚えてもらおうかな？　ねっ、王子」

おねだりする私と、得意げに「もーお！」を繰り返す王子を、森男はじっと見ていた。

この時、私には知る由もなかったけれど。

『王子がしゃべり始める』という出来事は、私が思う以上に大きな意味を持っていたのだ。

数日後のこと。

「あ、森男」

バルコニーで洗濯物を干していた私は、窪地の斜面を下りてくる森男に気づいて手を休め、階段を下りていった。

「いつもごくろうさまー、三河屋のサブちゃん」

この場所では誰にもウケないネタを言いながら近寄ると、森男がくいつと顎を上げて、口にくわえた何かを差し出してくる。

封筒だった。

「手紙？」

ツリーハウスで目を覚ましてから、そろそろ六ヶ月。その間一度も接触などなかったのに、今になって誰かが私に連絡を寄越してきたことになる。

急に胸がドキドキし始めた。震える手で封をしていないその封筒を受け取り、中から折りたたまれた紙を取り出して開く。うっすら透けた、高級そうな紙。

そこに書かれていた文章は、日本語ではなかった。久しぶりに目にする文字は、象形文字をいくつか組み合わせたような、見たこともない文字。

それなのに、私はそれを自然に読むことができた。文字の一つ一つの読み方はわからないのに、意味だけが頭に飛び込んでくるのだ。難しい漢字を見て部首や旁からその意味を類推する感覚に似ているけれど、それがもつとハッキリとイメージできる感じ。

そんなだから、細かい言い回しはわからないけれど、文面の意味するところはこうだった。

『子どもを連れて、この手紙を持参した者についてくるように。今までのことを全て説明する。決して危害は加えない』

この、わけのわからない状態を、誰かが説明してくれる？

森男はダークグリーンの瞳で、私をじっと見つめている。私は彼を指さして言った。

「森男に、ついて行けばいいの？」

すると、森男がこっくりとうなずいたのだ。

はつきり言って、手紙の内容よりもこちらの事実の方に仰天して、私は顎が外れそうになった。その仕草は、動物が覚えた芸というよりも、明らかに人間の自然な動作そのものだったからだ。

「お……王子も？」

こっくり。森男がまたうなずく。

私は、王子がいるツリーハウスと森男の間でせわしなく視線を往復させ、
「……いい、今すぐですか!？」

と聞いた。なぜか敬語。

森男はちよつと考えて——本当に考え込んでいるように、ちよつと視線を上げたりして——やがてうなずいた。

「ちよ……ちよつと、ちよつとだけ待ってもらっていいですか」

私はバクバクする胸を押さえ、その場に座り込んで深呼吸した。ちようどその時、ツリーハウスから、昼寝から覚めたらしい王子が「まーたん！ まーたん！」と私を呼ぶのが聞こえてきた。

そして十数分後。

いつも荷物を受け取るのに使っている袋に王子の身の回りの品を詰め込んで、私と王子はツリーハウスを離れ、森男に導かれて森の中へと踏み込んでいったのだ。

第二章 名前のない異邦人^{いほうじん}

森の中はフィトンチッドたつぷりって感じで気持ちがいい。

と、最初は気楽に思っていたのだけど。

ついでこいつて手紙に書いてあったから、馬鹿正直に森男についてきたけど、もうずいぶん歩いたよね。知らない道だから、余計長く感じる。あとどれくらいかかるんだろう。

疲れて抱っこをねだる王子を抱き上げた時、ふと鼻先をかすめた匂いに私は鼻をうごめかせた。進行方向から吹いてくる風、この風の匂いは……

やがて、ようやく木々の隙間から光があふれた。広い空間があるのだ。

森を抜けて、私は目を丸くした。王子をしつかり抱きしめる。

「王子……海だよ！」

そこは岬^{みさき}の突端だった。私が立っている場所は広い岩棚のようになっていているものの、数メートル先は断崖絶壁。下は穏やかな海。さっきの覚えのある香りは、やっぱり潮^{しほ}の香りだったんだ。

ここは島だったの？ 半島とか？ かすかに対岸が見えたけど、様子まではわからない。

振り返ると、森の上に大きな樹が——ツリーハウスのホストツリーになっていたあの大樹が、びよこんと飛び出て見えた。その上には虹がかかっている、童話のような風景にしばし見とれる。

突然、森男が私の左手に触れてきた。硬い肉球は、ピンクと黒のまだらで魅惑的。何を隠そう私は猫派です。たまらん。

可愛いなあと思っていると、そつと腕を持ち上げられた。されるがままに左手を前に上げると、手首に巻きついた薄い緑色の文字列が目に入る。もはやすっかり馴染んでいた刺青いれずみのようなそれが、急に光ってフワツと解け、腕から離れた。

「な、何？」

解けた文字は、まるで私が新体操のリボンの演技をしているかのようにクルクルツと螺旋状らせんじょうに舞い、地表に円を描いた。

一方の端は私の手首につながったままで、そのままぐぐつと引つ張られる感覚があり、たたらを踏んだ私は円の上で立ち止まる。

引つ張られるこの感じ——あの、結婚式の時と同じ！

あたり一面にカメラのフラッシュのような強い光が満ち、私は固く目を閉じた。

まぶたの裏の光彩が消えたのを見計らって目を開くと、私は王子を抱っこしたまま、広い部屋の絨毯じゅうたんの上に座り込んでいた。

床から天井まで届く、大きな窓。白いカーテンは全て端に寄せられて、部屋は明るい。一方の壁には大きな本棚がずらりと並んでいる。

そして私の目の前には、透き通った球体が浮かんでいた。直径が三メートルほどありそうなそれ

は……水？ 水が球になって浮いてるの？

何だか覚えがあるような……水の中で、いくつかの人影が揺れる記憶。

軽いめまいを覚え、私は水の球から目を逸らして窓の方を見た。

……男性が、着替えをしていた。

というか、裸だった状態に服を着ているところだったらしく、向こうを向いたままズボンを引き上げたところ。セーフ。いや何が？

上半身を起こした彼は私より頭一つ分くらい背が高く、細身の割に腕や背中にはしっかり筋肉がついていた。その上に直接、ざつくりした立襟のジャケットを着る……裸にシャツなしで上着って、ちよつとエロいな。

じゃなくて！ 何でまじまじと見るの！

頬がかあつと熱くなるのを自覚しながら、ぱつと視線を逸らす。やがて着替えが終わったのか、男性がこちらに数歩近づいて立ち止まる気配がした。

私の腕の中、王子が肩越しに男性を指さして言った。

「もーおー！」

「えっ？」

私は思い切って、もう一度振り返った。

少なくとも、日本人には見えない男性だった。私と同年くらいだろうか……シャープな頬のラインがストイックな雰囲気を漂わせている。

枯れ草色の短い髪、ダークグリーンの落ち着いた色の瞳。その瞳には、見覚えがあった。

「……森男？」

ためらいつつ、尋ねる。

彼は無言で、ゆっくりとうなずいた。きりつとした目元が、微笑みとともに優しくなった。

突然、咳払いの音が響いた。

「お疲れ様でした」

その声にぱつと振り向くと、両開きのドアの前に別の男性が立っていた。

こちらは森男（？）よりもさらに背が高い。ひよろ高い、という表現がピッタリくる。

私より少し年上だろうか……ブルーグレイの長い髪は無造作に首の横で結ばれ、金茶色の瞳は銀縁のメガネを通して私を真っ直ぐ見ている。着ている白衣は、お医者さんのものというよりもシェフの服に似ていた。

「まずはこちらへ。軽食が用意してあるので」

言葉は丁寧だけど、どこかぞんざいな仕草で促される。

ついていっていいものやら……つて、もうここまで来たら仕方ない。王子も指をちゅばちゅばやつて、明らかに空腹な様子だし。

部屋を出てよく磨かれた板張りの廊下を歩き、隣の部屋に入る。石造りの暖炉、布張りのソファに一枚板のローテーブル……部屋の大きさや廊下の長さを見るとかなり大きなお屋敷みたいだけど、

調度は実用一辺倒という感じ。そこが逆に、私には好感が持てた。

ローテーブルの上には、お茶の道具とマフィンのようなものが載った皿があった。

「まんまー」

王子がさつそくよちよちと近づいていく。わーちよつと待て、森の中を遊びながら歩いてきたから手が汚れてるのよー。

「あの、手を洗いたいんですが」

口に出した言葉に違和感があつて、思わず自分の唇に触れる。

私、今、何語をしゃべった？

「ああ、オレの言葉を聞いて「スイッチ」が入ったんだろう。聞くのも話すのも大丈夫そうだな」長髪の男性が、当たり前のように言った。……どこからどう質問すればいいんでしょうか。

それに今さらながら、さつきからこの男性が話している言葉も日本語じゃないことに気づいた。半ば呆然としながら、この部屋と続きになっている炊事場らしき場所に案内されて、陶器の洗面台で手を洗わせてもらった。

元の部屋に戻って勧められるままソファに腰かけると、王子は私の隣にびったりくっついて座つて、マフィンにかじりついた。ジュースまでもらつてる。満喫してますね。

森男（？）はそんな王子のそばに片膝をつき、まるで騎士のように付き添っているんだけど、すつと背筋の伸びたその姿勢がまたすごく様になっている。

誰か人間と会つて、いきなり王子と引き離されたら……とちよつと怖かったんだけど、この分だ

と今のところは大丈夫そうなので、私はホツとした。

それにしても、男性ばかりで緊張するわ。花嫁のブーケをゲットしたと思ったら、別世界に来て新しい出会い、ですか。私まだ、地球の男に飽きてなんかいないんですけど。

うわーこんなこと言ったら何歳だと思われるだろ？ いや、ここじゃ関係ないのか。

「では、一通りのいきさつを説明しよう」

メガネの男性の涼やかな声で、逃避しかけていた思考が現実に戻る。この世界に来て私の数え方で六ヶ月弱。ついに説明してもらえるんだ。

「オレの名はラズト、あなたが『モリオ』と呼んでいた彼は、カザムと言う」

森男……いや、カザムさんが会釈する。

やっぱりこの人が、パンダもどきに変身してたってこと？ 魔法か何かなの？

「ラズト、さんに、カザム、さん……」

「呼び捨てで構わない。我々とあなたとの間に上下関係はないのだから」

そうは言ってくれるけど、なかなか初対面の人を呼び捨てにはできないよ、私。

ちょっと困ってラズトさんを見る……ふわあ、足の長い人って座ると余計長さが際立つな。膝の位置が高くて、長さを持てあましてる感がひしひしと。

「あなたのことは、何とお呼びすれば？」

ラズトさんに聞かれて、私は一瞬だけ考えてから答えた。

「……マミと呼んで下さい。この子も、私のことは『マミちゃん』と——『まーたん』と呼びます」

——これは本当に偶然だったんだけど。

私は本名の『小梅』ではなくて、王子には『マミ』という名前を教えていた。七緒が小さい頃、ある理由から私のことを『マミちゃん』と呼んでいたから。

そして今、私はとっさに決めたのだ。この人たちが私についてどれだけ知っているのかわからなければ、私からはなるべく情報を出さないようにしよう、と。

個人情報保護の時代だもん、常識でしょ。何に利用されるかわかったもんじゃなし。一応大人の女ですから、いくらのおんびり屋の私でもその辺は注意するよ。

それに、ここは私の住んでいた世界じゃない。だから、名前を教えていいのかすらわからない。昔読んだ、世界的に有名なファンタジーにあったもの。真の名を教えると相手に支配されるから、

人々は普段は通称のようなものを使っている、っていう話が。

うん、やっぱり名前は教えない方がいい……少なくとも、もう少しこの世界のことかわかるまでは。

「まず、ここはウイオ・リゾナ王国という」

黙って聞いている私に、ラズトさんは話を続けた。

「おそらく、あなたの知っている地図には載っていないだろう。マミは、空間を渡ってこちらに来たと思われる」

ハッキリ言われた。薄々、そうだろうなとは思っていたけど、今ここでハッキリと。

王子を初めて見た時「ガイジンの赤ちゃん」なんて思ったけど、ここでは私の方がガイジン……いや、異世界人、だったってことか……

「まずはその子のことから話そう。……ありがちな話だが」

そう前置きして、ラズトさんがかなり簡略にまとめて話してくれた内容は、こうだ。

ウイオ・リズナの王さまには、二人のお妃さまがいる。

第一夫人には娘が一人生まれたけど、他には子どもに恵まれなかった。この国では伝統として男性が王位を継ぐので、男の子を産むことを期待されて、若い第二夫人が興入れした。

しかし第二夫人にも、娘が一人産まれたきり子どもができない。そこで、第一夫人の娘が年頃になった時、王族の中からお婿さん（むこ）をもらい、その人が王太子ということになった。

ところがなんと今頃になって、王さまの第二夫人が再び身ごもった。

ここからがドロドロの宮廷劇の始まりだ。王太子の実家は、「第二夫人に生まれるのがもしも男の子だったら、王太子の立場はどうなるんだ」と戦々恐々。いくら王さまが「王太子の地位を今さら取り上げることはない」と言っても聞く耳持たず。

第二夫人はもともと王族ではなく市井（しげい）の出なので、後ろ盾も弱い。とうとう暗殺の危険までささやかれるようになった。

これでは、無事に出産できたとしても子どもの命が危ない。実際、慎重に選考を進めていた乳母（うぼ）候補にまでクセモノが交ざっていて、人選は出産直前に白紙に戻ってしまったそうだ。

第二夫人には、全く出世欲がなかった。いつも第一夫人派を立てて、王位もどうぞどうぞという感じだったのに、向こうはそう思ってくれない。子どもが無事に生まれて健やかに育ってくれば、王位なんていらぬのに。

出産間近の第二夫人は、精神的に追いつめられた。

「もうわかったと思うが、こうして生まれた第二夫人の子どもが、あなたが『オージ』と呼んでいたこの子だ」

ラズトさんが言った。

大人たちの視線を集めて驚いたのか、王子はマフィンのくずを口の周りにいっぴいつけたまま紺色の瞳をキョロキョロさせたけれど、ふにやっと笑って言った。

「おいちー」

「……本当に、王子さまだったんだ」

呆然とつぶやくと、二人がもの問いたげに私を見つめた。

そこで『オージ』というのが本当にそのままの——『王の息子』という意味であることを教える。さすがに二人とも驚いたようだ。

別に私が王子の素性を知っていたわけではなく、私の国では王族でなくても『高貴な男性』という程度のニュアンスで使うこともあり、この場合は親バカっぷりのこもった呼び名なのだど教えると、納得していたけど。

「話は飛ぶが……その頃オレは、とある疫病えきびょうの研究をしていた」

説明するラズトさんの歯切れが、段々悪くなってきた。あ、ここで私が絡んでくるんだな。「特定の家畜がかかる病気に、有効な薬を探していた。ある花から抽出ちゅうしゅつした成分が有効だとわかったが、今一つ効き目が弱い。それで、その花を媒介にして、探索の糸を伸ばした」

「探索の糸？」

「そう。これだ」

ラズトさんが左手の甲を上にして私の前に出した。少し袖を上げると、手首のあたりに刺青いれずみのような文字列が見える。私の腕にあるものよりも、少し色が濃い。

その文字列から光る筋が伸びて、血管のように手の甲を走った。そしてフワッと空中に浮かび上がり、さらに伸びる。

「わあ……」

私はあたりを見回した。光る糸が空中に溶けて消えているんだけど、見えないだけでこのあたり一帯に広がっているのがなんとなく感じられる。

ラズトさんって、お医者さんなの？ 魔法使い？ 学者？

確かに彼の雰囲気は『ラズト先生』って感じ。メガネがすごく似合っていて、私の世界だったら『メガネ男子』なんて言われてモテそう。あ、既婚者かもしれないよね、これだけカッコよかったら。「もっと効き目の強い花がないかと探すうちに、探索の糸があなたの住む世界の花に届いてしまったらしい。あなたの世界とこちらの世界は、空間的に近かったと思われる」

話に自分が絡んできたので、私はつい身を乗り出す。逆にラズトさんは、ちよつと身体を引く。

「まーたんー！」

話に夢中な私が気にくわないのか、王子が私の手をぐいぐい引っ張った。

「ごめん、今すぐく大事な話。森男、ちよつと相手してて」

王子を森男に丸投げ。……あ、カザムさん、だった………ついウツカリ『森男』感覚で。まあいや、今はこつちの話の方が大事。

カザムさんは当たり前のように王子の相手をしてくれ、二人は私がツリーハウスから持ってきた布製ボールで遊び始めた。

ラズトさんが咳せきばらいをし、思い切ったように言った。

「そういうわけで、その花を手に入れようと引っ張ったら、花束せきを手にしたあなたがこちらにやってきてしまったわけだ」

花が目的か！ あの花嫁のブーケが。私はつい一本釣りされたわけですか。

確かに、大事なブーケだったからしっかり握りしめた記憶は……ある。

「何で切り花なんか……普通に地面から生えているやつの方がよさそうなのに」

どうでもいいことを聞いてしまったけど、私が初めて質問したからか、ラズトさんもちゃんと答えてくれる。

「切り花一本で、分析には事足りる。それに、何か……儀式のようなことをしていなかったか？ それに使われた花では？ そういう『場』には、こちらの力が作用しやすいようだ」

「はあ……」

私は脱力したものの、心の片隅でちょっとホッとしていた。

妹じゃなくて良かった。結婚してまさに幸せになるうとしてる小彩が、ブーケのおまけでたった一人異世界に来てしまうなんて、あんまりだもん。

そう、それに七緒でもなくて良かった！ 小学生で異世界に引っぱり込まれて一人で半年も育児とか、絶対過酷すぎる。私で本当に良かったよ。

そう思ってしまった私は、大きな不幸の中でも小さな幸せが見つかればオーライという性格です。いいのかそれで、と内心自分に突っ込んでいる間にも、ラズトさんの話は続く。

「空間を渡ったあなたは弱っていて、しばらく意識不明の状態だった。それで、オレはさっきの部屋にあった『シュイ』にあなたを入れた。あの球体の中の水を通して、こちらの世界に適応させるためだ。その過程で、この世界の言語を……脳に働きかけたというか……」

言葉を選ぶラズトさん。

「要するに、私は睡眠学習したわけですね、言葉を」

私は要約した。それで私は、こちらの言語が大体わかるんだ。

新聞広告なんかでたまに見るけど、本当に効果あるんだね、睡眠学習って。まあ私の世界の睡眠学習とは色々な点で違うんだろうな。装置(?)も高度ですごい……あの水の球って、『シュイ』って言うんだ。

あれ? でも、手紙の文字は何で読めたの? 睡眠学習で文字まで覚えられるなら、日本でも漢

字を覚える教材があってもいい気がするけど、それは見かけたことがないし。今度聞いてみよう。

「話は戻るが……その子のことだ」

ラズトさんが軽く手を上げて、王子を指す。

ん? ラズトさん、左手の薬指に指輪をしているではないですか。あつ、気がつかなかったけどカザムさんもだ。二人とも既婚者?

いやいや、ここは異世界でした。習慣が同じとは限らないよね。

「国王陛下と第二夫人から出産前に相談を受けたオレは、子どもを守るため、マミを乳母に推薦した」
私は注意を引き戻され、ぼかんとして尋ねた。

「乳母? 乳母って、赤ちゃんにおっぱいあげる乳母?」

「……いや……」

「……なわけないですよね」

しーん。ちよつぱり気まずい沈黙。

あわわ。ツリーハウスに粉ミルクがあったのに母乳を求められてるわけじゃないじゃない、何言ってるの私。ついついおっぱいとか言ってしまった……

「エヘン。えっと、お母さんの代わりに育てる人って意味ですね、はい。それで、なぜ私を?」

「一つにはあなたが、この跡目争いにおいて全く無関係の第三者だからだ。利害関係がないどころか、この世界の間でさえなかったわけだから」

開き直ったのか、メガネを直しながらつつけと続けるラズトさん。